
東方 紅魔館物語

SESERAGI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 紅魔館物語

【Nコード】

N6239Y

【作者名】

SESERAGI

【あらすじ】

瀬世羅木 努青年が幻想郷の紅魔館に来る物語。物語を考えてた瀬世羅木は物語が思い浮かぶ困ってしまう。目を瞑り気が付くとそこは見た事の無い森だった。瀬世羅木は森を出て大きな建物がある。それが幻想郷に出る紅魔館だと知る。紅魔館の人物達に会う瀬世羅木。彼の運命は、そして彼は現実世界に戻るのか。

登場人物（前書き）

初めまして。作者のSEESERAGIです。長文で失礼します。前作を見て頂いた方はありがとうございます。今回は連載と言う形で物語を書かせて戴きます。なので連載される迄の間が空きすぎと思われる方も出てくると思います。今回から小説の書き方を替えて行きます。小説を読まれる際の注意事項。原作のキャラクターを使用させて戴いております。この物語でキャラクターの言動、行動、性格、その他が原作と違うと思われるかたがいると思います。ご了承ください。

登場人物

瀬世羅木 努

物語の主人公です。20代の青年で趣味で自作の物語を考えてる。

レミリア・スカーレット

物語の副主人公です。紅魔館の主で吸血鬼。少女の姿をしているが何百年と生きている。

フランドール・スカーレット

紅魔館の主のレミリア・スカーレットの妹。何を考えてるか分からない破壊的行動を取る事からレミリアに地下牢に入れられてる。少女の姿をしているが何百年と生きている。

十六夜 咲夜

紅魔館の主のレミリア・スカーレットに尽くすメイド長。20代位の女性。

パチュリー・ノーレッジ

紅魔館のレミリア・スカーレットの友人で図書館長。魔法使い。少女の姿をしているが何百年と生きている。

紅美鈴

紅魔館の門番を担当する中国人。20代位の女性に見えるが何百年と生きている。門番をサボり咲夜にお仕置きを受ける時がある。

小悪魔

紅魔館の図書館長のパチュリー・ノーレッジの司書。20代位の女性に見える。

初めての体験

空は星が出る冬の空、満月も出てる。

少し新しいアパートが見える。

その一室で一人の青年がパソコンをじっと見てる。

青年「……。」

パソコンを見て悩んでる。

青年「趣味で物語を書こうとしてるけど題名だけでちっとも物語が
思い浮かばないよ。」

パソコンには「東方紅魔館物語」と書かれてる。

青年「少し休憩しよう。」

青年は台所に行って冷蔵庫を開け紅茶を出しコップに淹れた。

青年は紅茶を飲む。

青年「……紅茶と言えば、やっぱりレミリアだな。」

青年は物語を考えながら紅茶を飲んでる。

「ピンポン」

チャイムの音だ。青年が返事をする。

青年「はい！。」

「瀬世羅木さんのお宅ですか？」

声がする。青年が玄関を開けた。

「はい、瀬世羅木です。」

青年、瀬世羅木が玄関の外に立つ人物を見る。

瀬世羅木「宅配便の方ですか。」

宅配便の男性は頷く。

宅配便「お待たせした品をお持ちしました。」

瀬世羅木は品を受け取る。

瀬世羅木は宅配便の方にサインを書いて玄関を閉めた。

瀬世羅木が品物の入ってる袋を見る。

瀬世羅木「待っていたんだよな。」

瀬世羅木は袋を開ける。中にレミリアスカーレットのライターが入ってる。

瀬世羅木は中の物を取り出す。

瀬世羅木「さすがネットオークション探せば何でも在るもんだな。」

瀬世羅木はライターをポケットに閉まった。

瀬世羅木「よし、休憩はもう良いから。続き、続き。」

瀬世羅木はパソコンの在る所に戻る。

瀬世羅木「よし、書くぞ!。」

瀬世羅木はパソコンを打つ。

1時間後。

瀬世羅木「ぬわあああ!駄目だ全然思い浮かばない!。」

瀬世羅木はキーボードをどかして顔を置いた。

瀬世羅木「もう、夜中の10時か。少し目を瞑って頭の整頓でもしよう。」

瀬世羅木は目を瞑った。

瀬世羅木「!!!。」

突然、肌に寒さを感じ目を開けた。

瀬世羅木「どう・・・なっているんだ??。」

瀬世羅木は驚いた、そこは見た事の無い森の中だ。

瀬世羅木「何て事だ。・・・取りあえず適当に歩くぞ。」

瀬世羅木は森の中を歩く。出口が見えて来た。

瀬世羅木「よし！。出口だ。」

瀬世羅木は走る。

瀬世羅木は森を出た。

瀬世羅木「何だ？。この大きな建物は・・・。」

瀬世羅木は目を疑う、目線の先に大きなレンガで造られた建物がある。

「ガーン！！ガーン！！」

建物の鐘が鳴る。

瀬世羅木はこの建物に見覚えのある表情を浮かべる。

瀬世羅木「・・・まさか、これは、紅魔館？」

瀬世羅木は右手で頬つぺたを引っ張った。

瀬世羅木「イッテッテッ！」

痛みを感じる。

瀬世羅木「夢では無い……。」

瀬世羅木はいつも肌にはなさず持っている携帯を出した。

携帯で紅魔館と検索して画像を見る。画像と建物が一致する。

瀬世羅木「……こんな、こんな事は初めてだ。俺はどうやらゲームの……幻想郷の世界に来てしまった……。」

瀬世羅木はただ呆然と立っている。

瀬世羅木「これも何かの巡り合わせだ、せつかく今、こうして紅魔館の前にいるんだ。俺が願っても会えなかった人物に会える絶好のチャンスだ!!」

瀬世羅木は門の方に向かって行った。これから彼の運命が変わるとも知らずに。

初めての体験（後書き）

第1章は、主人公だけの登場になってしまいました。次回からはいよいよ、門番やらメイドやら主やら続々登場します。瀬世羅木は果たしてどうなるのか。次回にご期待あれ。

侵入者扱い

瀬世羅木は門の前に着いた。

緑色の服を着た中国人風な女性が立っている。

女性は立ったままの状態で眠っている。

瀬世羅木「俺の記憶が合つてればこの女性は紅美鈴・・・」

瀬世羅木はまじまじと見る。

瀬世羅木「随分、器用な人だな。立ったまま寝るなんて・・・」

瀬世羅木は女性の前に立つ。

瀬世羅木「美鈴さんが起きてくれないと入るにも入れないな。」

瀬世羅木は美鈴の肩に手を置いて揺らした。

瀬世羅木「すいません！起きて貰えますか。」

瀬世羅木は彼女を強く揺らす。

「バキッ！！」

美鈴の右パンチが瀬世羅木の顔に直撃した。

瀬世羅木「いつてえー！！！！」

骨にヒビが入る程の力で殴られた。

瀬世羅木は自分の顔をなげる。

瀬世羅木「・・・恐ろしいパワーだ…。下手に起こさない方が
良いな。」

美鈴はまだ眠っている。

瀬世羅木は門を開けて中に入った。

瀬世羅木「これじゃ、不法侵入だな…。」

瀬世羅木は歩く。大きな扉が在る。

瀬世羅木「さすがにここからは無断に入れないな。」

瀬世羅木は門を叩こうとした。

その瞬間。

瀬世羅木の背後から首もとにナイフを当てられた。

瀬世羅木「!!!。」

瀬世羅木はその場で固まった。

？「この館を知っての不法侵入？」

女性の声だ。

瀬世羅木「・・・その声は十六夜咲夜…さんですね…。」

あくまで記憶上の事で言ってる。女性が返事を返す。

女性「なんで私の名前を知ってるかは知らないけど、貴方には来て貰うわよ。」

瀬世羅木「分かった…。」

瀬世羅木は咲夜に連れられ館の中に入る。

階段を上がり長い廊下を渡る、そして扉の前で止まる。

咲夜「お嬢様、侵入者をお連れしました。」

扉を開けて部屋に入る。

瀬世羅木は部屋に座っている女性を見て驚いた。それは、自分が一番に会いたい人レミリアスカーレットその本人が座っているからだ。

だがこの状況下でそれを喜べなかった。一つ間違えたら自分は殺されるかも知れない。そう思ったからだ。

レミリア「貴方に聞くわ。不法侵入した訳を話してくれないかしら？」

少女見たいな声で聞こえる。だがその言葉には強い威圧感を感じる。

瀬世羅木「レミリアスカーレット殿、不法侵入をしたことは謝ります。」

レミリアが首を傾げる。

レミリア「何で私の名前を知ってるかは分からないけど、答えが間違ってるわね。私は訳を聞いてるのよ…。」

ごく一般の少女の声だが恐ろしく聞こえる。

咲夜「お嬢様、先程この侵入者、私の名前も当てたんですよ。もしかして私達が忘れてるだけで実は会った事がある人かと？」

レミリアは首を横に振る。

レミリア「いいえ、咲夜、私は一度も会った事は無いわ。・・・名前を知ってるのは、どうせ誰かから聞いたんじゃないの？」

咲夜は頷く。

瀬世羅木「話しても信じて貰えるか分かりませんが、自分はこの世界から違う世界から来ました。どうやって来たと言われても自分でも分からないんです。」

瀬世羅木は懸命に話す。

咲夜が瀬世羅木の首もとにナイフをまた当てた。

咲夜「そんないい加減な話をよくもお嬢様に！死になさい！！。」

咲夜が瀬世羅木の首を切ろうとした。

その前に。

レミリア「咲夜…。まだ、殺すのは止めなさい。」

咲夜は動きを止めた。

瀬世羅木の心臓の鼓動が速くなる。

瀬世羅木「いついつ今、ほっ本当に殺されるところだった。」

顔から冷や汗をだし心の中で言う。

瀬世羅木「恐ろし過ぎる。自分の世界では尊敬するキャラクターだが、いざ自分がターゲットにされていると思うとこれ程までに恐ろしいとは思わなかった。」

瀬世羅木は動揺を隠しきれて無い。

レミリアが見る。

レミリア「貴方が違う世界から来たのは信じるわ。幻想郷の皆は、まずそんなに怯えないからね。」

瀬世羅木「いや、まず、俺の立場に立たされたら幻想郷の者でも怯えると思うけど…。」

心の中で呟く。

レミリア「咲夜、この男をフランのいる地下牢に入れてあげなさい。」

その言葉に瀬世羅木は震えた。

瀬世羅木「・・・フランって、貴方様の妹に殺されると言う事です
ね...。」

レミリアは微笑む。

レミリア「フランの事も知っているのね。なら話しは早いわ。そう、
貴方の運命はもう決まっているのよ.....。」

咲夜が瀬世羅木を掴む。

瀬世羅木「何て事だ.....俺は一番に尊敬している人物のレミリアに
死の運命をかけられるなんて.....。」

瀬世羅木はうつ向き、そのまま咲夜に連れられ部屋を出された。

レミリアが紅茶を飲む。

レミリア「フラン。たっぷり遊んであげるのよ...。」

レミリアが又も微笑んだ。

侵入者扱い（後書き）

いよいよ第2章も終了しました。瀬世羅木はフランのいる地下牢に連れて行かれる。彼は一体、どうなってしまうのか。
次回は「奇跡を呼ぶ宅配物」でお会いしましょう。

奇跡を呼ぶ宅配物

瀬世羅木は咲夜に地下牢に連れて行かれてる。

瀬世羅木「……。」

瀬世羅木はうつ向いたままだ。

階段をおりる。

辺りは暗い闇の中だ。

瀬世羅木「地下なのに随分暑いな……。」

咲夜は瀬世羅木を奥の方まで連れて行く。

突き当たりに鉄の扉がある。

鍵はかかっていない。

咲夜が扉を開ける。

咲夜「入りなさい。」

瀬世羅木は中に入った。

咲夜が外から扉を閉める。

瀬世羅木「……フランのいる地下牢……。」

瀬世羅木の体は震えてる。

？「・・・ふふふ。」

女性の声だ。

瀬世羅木は声のする方を向く。

瀬世羅木は今度こそ完全に震えた。

瀬世羅木の目線の先にフランドール・スカーレットその本人が立っているからだ。目を輝かせて。

フラン「貴方はどんな風に壊されたい？…。」

恐ろしく聞こえる少女の声だ。

瀬世羅木の顔から大量の冷や汗が出る。

瀬世羅木「・・・フラン。壊すと言う事は俺を殺すんだな……。」

フランが微笑む。

フラン「こんな地下牢にいる私の名前を知ってるのね……。お姉様から聞いたんでしょ？…。」

瀬世羅木は首を横に振る。

瀬世羅木「いや、その前から知ってる。俺の尊敬する人物の一人だ

から…。」

フランが首を傾げる。

フラン「どこの誰か分からない人間に尊敬されても困るわ…。」

瀬世羅木「!!!。」

フランの体から赤いオーラが出る。

フラン「跡形も無く壊してあげるわ!!!。」

フランの握る両手が輝く。

瀬世羅木「まっまずい・・・本当に殺される……。」

瀬世羅木は下がる。

フランの両手は瀬世羅木に向けられた。

フラン「ふふ…。」

フランは恐怖におののく瀬世羅木の顔を見て喜んでは。

フランが両手を広げた。

フラン「スターボウブレイク!!!。」

瀬世羅木は物凄い光に包まれ様とする。

瀬世羅木「・・・死んだ……。」

瀬世羅木は光に包まれた。

フラン「ふふふ…跡形も無くなったわね」

光が止む。フランが瀬世羅木の立っていた所を見る。

フラン「!!!。・・・なんで?!。」

フランが瀬世羅木の立っていた所を見て驚いた。

瀬世羅木はキズ一つ無かった。

瀬世羅木「・・・どうなっているんだ?…。」

瀬世羅木は体を触る。

瀬世羅木「キズ一つ無い……。」

瀬世羅木「!!!。」

瀬世羅木の右ポケットが光ってる。

瀬世羅木はポケットに手を入れて光ってる物を出した。

瀬世羅木「これは!!。」

それは瀬世羅木が宅配物で届いた品。レミリアスカーレットのライタ―だ。

瀬世羅木「ただのライターなのにどうしてだ?。」

だが今はそれを気にするのは止めた。ただ運が良かった、そう思うだけにした。

フラン「浴びせ攻撃が効かないなら、直接攻撃よ!!。」

フランは右手にレーヴァティンを出し瀬世羅木の頭上に振り上げる。

フラン「死になさい!!。」

瀬世羅木「くっ!。」

フランはレーヴァティンを降り下ろした。

「ガキーン!!。」

レーヴァティンは瀬世羅木の頭に直撃した。だが・・・。

瀬世羅木「痛く無い!。」

瀬世羅木はレーヴァティンを退かし頭を触った。

フラン「どうして!、どうして!何も効かないの!。」

瀬世羅木はフランを見る。

瀬世羅木「どうやら俺は特別な力で守られてる様だ。・・・だけど
おかしいな美鈴さんのパンチは効いたんだけどな?。」

フランがうつ向いた。

フラン「・・・どうやら、貴方を殺すのはお姉様に任せるしかないわね……………」

フランはそう言つと目を閉じた。

扉が開いてレミリアスカーレットが入って来た。

レミリア「フラン。事情は貴方の心の声で聞いたわ。この男は貴方では無理の样ね。」

レミリアは瀬世羅木の前に立つ。

瀬世羅木「レミリア……。なんて事だ、主と闘うはめになるなんて……………」

レミリアは瀬世羅木を睨む。瀬世羅木はそれを見る。

奇跡を呼ぶ宅配物（後書き）

第3章も終了しました。瀬世羅木はレミリアと闘う事になる。はたして、彼の新たに持ったと言う力でレミリアの力を止める事が出来るのか。次回は「主の力と涙で」でお会いしましょう。

主の力と涙で

瀬世羅木はレミリアの前に立っている。

瀬世羅木「レミリア殿、俺が一番に尊敬する人物なのに、どうしてこんな事に……。」「

瀬世羅木はうつ向いた。

レミリア「貴方には特別な力がかかっているのはフランから聞いたわ。……でも、その力が私に通用するかしら？」

レミリアの体からオーラが出る。

レミリア「覚悟しなさい!!。」「

レミリアは右手を広げた。

瀬世羅木「……そっそれは……、グングニル……。」「

瀬世羅木はレミリアの握るグングニルを見る。

そのグングニルは自分の知る限りのグングニルとは違い余りに大きすぎる。

レミリア「この事も知っているのね……。でもこれの痛みは分からないでしょ?。」「

レミリアの瞳が輝く。

瀬世羅木は大量の冷や汗が出る。

瀬世羅木「・・・グングニル…。まさかそれを俺が喰らう事になる
とは…。」

瀬世羅木「!!!。」

ポケットに入っているライターが猛烈に輝く。

レミリア「貴方を守る力の源はそれね。」

レミリアが右腕を上げグングニルの先端を瀬世羅木に向けた。

レミリア「消滅しなさい……。」

レミリアはグングニルの握る右腕を最高に勢いをつける。

瀬世羅木「来る!!!。」

レミリアはグングニルを投げた。

物凄い衝撃波を放つ。

瀬世羅木の所に一直線に飛ぶグングニル。

瀬世羅木は無駄だとは分かっているが両手を前に出した。

瀬世羅木「絶対に受け止める!。俺の尊敬する人物に消されるなんて…。そんな結果は酷すぎる!。」

「ドン！！！」

グングニルが瀬世羅木の両手の前に止まる。

物凄い熱が伝わる。

瀬世羅木「やっぱり、駄目なのか！」

瀬世羅木はグングニルの衝撃波で後ろに押される。

レミリア「そろそろ、爆発するころね…。」

レミリアの言葉通りグングニルは猛烈に輝く。

瀬世羅木「大丈夫だ！。このライターの力さえあれば…。」

瀬世羅木は必死にグングニルの先端を押さえてる。

「ぴしっ！！。」

瀬世羅木「えっ？！」

ポケットのライターにヒビが入った音だ。

瀬世羅木「まずい！！。」

「ドッカーン！！！」

グングニルは大爆発した。

辺りは凄い煙が立つ。

フランの力でも動じない地下牢の壁にヒビが入った。

レミリア「……。」

レミリアが煙の立つ方、瀬世羅木の立っていた方を見る。

煙が止んで来た。

レミリア「フラン、貴方が破壊する筈の男を私が破壊してやったわ。」

レミリアはフランの方を向く。

フラン「……おっお姉様……。」

フランが瀬世羅木の立っていた方を指差す。

レミリアは振り向く。

レミリア「……なっ何で……??。」

レミリアは驚いた。

本来なら消滅してる筈の人物が立っているからだ。

瀬世羅木「……くっ、今のは本当に死んだと思ったよ。」

瀬世羅木の両手から血がたっぷり出てる。

瀬世羅木はポケットに手を入れてライターを出した。

ライターにはヒビが入ってる。

瀬世羅木「このライターが完全に壊れてたら、俺は完全に消滅してた。」

レミリア「そう、ならもう一発投げたら完全に消滅するのね。」

瀬世羅木はレミリアを見る。

瀬世羅木「これまでか!。」

レミリアは又右手を広げた。

だが。

レミリア「やっぱり止めるわ。」

フランが驚く。

フラン「お姉様!何で、相手は弱ってるのよ!もう一発喰らわしたら確実に……。」

フランが言い終える前にレミリアが。

レミリア「いいえフラン、だから尚更によ。ただの人間で私のグングニルを喰らっても生きている。そんな事は初めてだわ。」

レミリアが瀬世羅木の方を向く。

レミリア「貴方にもう一度聞いわ、貴方は館に不法侵入したのでは無く此所に様が有って来たのでしょうか？」

瀬世羅木「・・・そうです。紅魔館の方々の物語を書くと思ってこの紅魔館に来ました。」

レミリアは微笑む。

レミリア「そう…物語を書く為に。なら貴方は立派なお客様ね。」

レミリアはハンカチを瀬世羅木に渡した。

瀬世羅木「レミリア殿、これはハンカチ…。」

レミリア「両手の止血用よ。貴方にあげるわ。」

瀬世羅木は涙が出る。

瀬世羅木「ありがとうございます。」

瀬世羅木はハンカチで手を拭いた。

レミリア「まだ、貴方の名前を聞いて無かったわね。」

瀬世羅木「俺の名前は瀬世羅木努です。」

レミリア「私の名前は知っていると思うけど言いわ。私はレミリア

スカーレット。そして妹のフランドール。」

瀬世羅木は頷く。

レミリア「後、貴方が接しやすい喋り方で良いわ。貴方は私達の大切なお客様だから。」

瀬世羅木は血濡れのハンカチで涙を拭いた。

瀬世羅木「分かりました。」

レミリアは又、微笑む。

フランが瀬世羅木に近づく。

フラン「ふーん、何か男なのに弱そうに見える。」

フランは瀬世羅木の腰を叩いた。

瀬世羅木「ああああ!!。」

激痛が走る。先程のグングニルの影響だ。

レミリア「フラン、駄目よ!。」

フラン「ふふふ...。」

フランが微笑む。

瀬世羅木はレミリアとフランを見る。

瀬世羅木「一時はどうなるかと思ったけど何とか訳を分かってくれた。」

瀬世羅木はほっとした顔になる。

これから彼の人生を大きく変える。

主の力と涙で（後書き）

第4章も終了しました。瀬世羅木は何とかレミア達に理解して貰う事が出来ました。ただ彼はこれからが大変、物語を書いて行く彼に驚く事が。次回は図書館長と司書がいよいよ登場する。次回、「紅魔館の図書館」でお会いしましょう。

紅魔館の図書館

瀬世羅木はレミリアの部屋の椅子に座っている。

瀬世羅木「なんか、緊張しますね。」

レミリアが瀬世羅木を見る。

レミリア「緊張してる様ね、咲夜に紅茶でも淹れて貰う様に言っわ。」

レミリアは咲夜を呼んだ。

咲夜が来る。

レミリア「彼が貴方に頼みたい事があるみたいよ。」

咲夜が瀬世羅木の方に行く。

瀬世羅木「えっ？」

レミリアが微笑む。

レミリア「瀬世羅木、咲夜に紅茶をお願いするんじゃないのかしら？」

瀬世羅木「えっ。自分が頼むんですか?!。」

瀬世羅木の心臓の鼓動が早くなる。

瀬世羅木「余計に緊張させられるな。それにさっき怖い目にあったし。」

瀬世羅木は咲夜の方を向く。

咲夜は微笑んでる。

とてもさっき、自分が殺されそうにあった時の表情とは思えない表情だ。

咲夜「もしかして、私が恐ろしく見えるのですね。」

凶星を突かれた。

瀬世羅木「そっそれは…。」

咲夜「どうやら当たっているみたいですね。心配ありません、あんな表情をするのは滅多に有りませんから。」

瀬世羅木は椅子に座ってちっこくなってる。

瀬世羅木「恥ずかしすぎる。これじゃ自分が子供じゃないか」

咲夜「紅茶で良いんですね?」

レミリア「咲夜、あの紅茶を淹れてあげなさい。」

咲夜は部屋を出た。

レミリア「瀬世羅木、体の痛みは取れた？」

さっきのグングニルの事を聞いている。

瀬世羅木は体を動かす。

「ズキツズキツ。」

レミリア「ズキズキ聞こえるわね。ごめんなさいね、本気で投げしまつて。」

瀬世羅木「いや、こんなのは時間が経てば治ります。」

咲夜が部屋に入つて来た。

咲夜はカップに紅茶を淹れてる。

紅茶を渡された。

レミリアも紅茶を持つ。

瀬世羅木「いただきます。」

瀬世羅木は紅茶を見る。

瀬世羅木「随分紅いな。」

瀬世羅木は紅茶を飲む。

レミリア「私の血のブレンドよ。」

!!!!。

紅茶が喉につつかえた。

瀬世羅木「ごほっごほっ!!。」

レミリアが笑う。

レミリア「冗談よ。」

瀬世羅木「びっくりしましたよ。・・・でもレミリアの血を飲むと吸血鬼に成って永遠に生きれるって話は本当ですか?。」

レミリアが頷く。

レミリア「貴方以外と物知りね。そうよ、私の血を飲めば吸血鬼になって永遠に生きれるのよ。」

瀬世羅木「よして下さいよ。それは永遠に生きれるって言うのは興味有るけど、吸血鬼になるのは……。」

瀬世羅木とレミリアは笑った。

紅茶を飲み終えレミリアが。

レミリア「物語を書く為に来たのでしょ。ならうってつけの所があるわ。」

レミリアは立ち上がった。瀬世羅木も立ち上がった。

レミリア「付いてきなさい。」

レミリアと瀬世羅木は部屋を出た。

長い廊下を渡り階段をおりる。

瀬世羅木「この扉は!!。」

レミリア「あら、知ってるみたいね。そうよ、この先がこの紅魔館の図書館よ。」

レミリアは扉を押す。

瀬世羅木とレミリアは部屋に入る。

瀬世羅木は驚いた。

凄い本棚が立ちはだかる。

小悪魔「レミリア様。」

瀬世羅木は小悪魔を見る。

瀬世羅木「小悪魔か、っと言つことはこの館長もいる筈。」

瀬世羅木は周りを見る。

レミリア「小悪魔、パチエは何処にいるのかしら?。」

小悪魔「今、呼びます。」

暫くして小悪魔がパチュリー・ノーレッジを連れて来た。

パチュリー「レミィ。どうしたの？」

眼鏡をかけた、レミリアと変わらない少女だ。

レミリア「パチエ、彼の名前は瀬世羅木努、彼に此所の本を読むのを許可してあげる?。」

パチュリー「駄目よ!!。」

レミリア「何で??。」

パチュリー「此所の本は幻想郷の全ての歴史やら魔法書まで置かれてる。それをまったく知らない者に見せる訳にはいかないわ!。」

レミリア「パチエ!そこを何とかお願いよ。」

パチュリー「駄目よ!!。どうしても言うなら、その男性、私と小悪魔を倒してからにしないさい!!。」

レミリア「何を言ってるの?パチエ!。彼が勝てる訳が無いでしょう?。」

パチュリー「彼の思いを見せて貰っただけよ、でも殺す気にかかるけどね。」

パチュリーと小悪魔に睨まれる。

瀬世羅木が立つ。

瀬世羅木「なんで、俺は闘いと言っ運命から離れてくれないんだ……。」

レミリアも隣に立つ。

レミリア「さっき私は貴方にグングニルを投げた責任がある。いまも痛むその体で二人に勝つのは不可能よ。」

だが瀬世羅木はレミリアの方を向いて首を横に振った。

瀬世羅木「レミリア、ここは俺一人でやらせてくれ。」

レミリア「何を言ってるのよ！自殺行為よ！」

瀬世羅木はパチュリーと小悪魔の前に立った。

パチュリー「行きますよ、小悪魔。」

小悪魔「はい！」

パチュリーと小悪魔はいつせいに瀬世羅木にかかる。

紅魔館の図書館（後書き）

第5章も終了しました。瀬世羅木は図書館の本を見せて貰うのにパチュリーと小悪魔と勝負をする。彼は果たして二人に勝つ事は出来るのか。次回は「友情」で会いましょう。

友情

パチュリーと小悪魔はいつせいに瀬世羅木にかかる。

瀬世羅木「レミリアに一人でやらせてくれと言ったのは良いけど…
…この状況はまずいかもしれないな。」

パチュリーと小悪魔から凄い殺気を感じる。

パチュリー「小悪魔！貴方は彼の動きを封じて！」

小悪魔「分かりました！」

パチュリーと小悪魔は別れる。

瀬世羅木「俺の守られてる力はさっきのグングニルで駄目になったから…いやまてよ、もしかしたらまだ守られてるかも知れない！」

レミリアは瀬世羅木を見る。

レミリア「…瀬世羅木、貴方は本当に普通の人間よ。パチエ達に勝つのは絶対に無理だね。」

レミリアはパチュリー達を見る。

瀬世羅木は本棚の方に走る。

瀬世羅木「さすがにパチュリーさんもこの本棚目掛けて攻撃はしないだろう？」

小悪魔「無駄ですよ！」

瀬世羅木「何?!。」

瀬世羅木は小悪魔に捕まれた。

瀬世羅木「・・・無駄だと言っのはどういう…。」

小悪魔「此所の本全てはパチュリー様の力で守られてます。なのでパチュリー様の攻撃は動じません！」

瀬世羅木は力一杯小悪魔の腕を外そうとした。

瀬世羅木「びつ、びくともしない……。。」

小悪魔の力はとても女性の力とは思えない力だ。

瀬世羅木「それに、俺は非力だからな。」

パチュリーが瀬世羅木の前に立った。

パチュリー「小悪魔！私が魔法を放ったら直ぐにどくのよ！」

小悪魔は頷く。

瀬世羅木「くっそー！。」

瀬世羅木は必死に小悪魔の腕を外そうするが全く駄目だ。

パチュリー「・・・日符：。」

瀬世羅木は震える。

瀬世羅木「そつそれは！！」

パチュリー「ロイヤルフレア！！」

物凄い閃光が瀬世羅木をのみこむ。

瀬世羅木「・・・。」

小悪魔の腕が外れた。

だが、この状況から逃げれない。

閃光は完全に瀬世羅木をのみこんだ。

パチュリーと小悪魔はロイヤルフレアを放った先、瀬世羅木の立っている方を見る。

閃光は止みパチュリーと小悪魔が見る。

パチュリー「！！！」

小悪魔「！！！」

瀬世羅木は立っている。だが酷いキズだ。

瀬世羅木「ぐっ！。」

瀬世羅木は床に量びざがつく。

瀬世羅木はポケットに手を入れる。

瀬世羅木「……。」

ポケットから出しライターを見ると大きなヒビが入って中のオイルが少し出てきてる。

瀬世羅木「つつ、次はもう、無いな……………」

パチュリーが又も瀬世羅木の前に立つ。

パチュリー「ロイヤルフレア、一回では駄目ね。ならもう一度……。」

パチュリー「日符……………」

瀬世羅木はうつ向く。

パチュリー「ロイヤルフレア!!」

又も閃光が出る。

瀬世羅木「今度こそ……………完全に終わった……………」

ロイヤルフレアは瀬世羅木をまたのみこむ。

パチュリー「さすがに二回もつければ跡形も無くなったでしょ?」

パチュリーが小悪魔を向く。

小悪魔「パ、パチュリー様…まずい事になってます。」

パチュリーが瀬世羅木の立っている方を向く。

パチュリー「・・・レミィ…。」

パチュリーがロイヤルフレアを放った先、瀬世羅木の立つ前にレミリアが立っている。

レミリア「パチエ、もう終わりよ。」

瀬世羅木がレミリアを見る。

レミリアはキズ一つ無い。

パチュリー「レミィ！。どうして！そこまでして守る人なの？！。」

レミリアが微笑む。

レミリア「それは、私と貴方と一緒に。私と貴方が友人でいるみたいに瀬世羅木と私も友人だからよ。」

パチュリーはうつ向く。

パチュリー「それは、同じ友人同士、争うな、っと言うことね……。」

レミリア「パチエ。彼を信用して、と言うのも無理かも知れないけど…。ここは、貴方からも許可してあげて。」

パチュリーは考えてる。

パチュリー「小悪魔、貴方はどうなの？」

小悪魔「私は、パチュリー様が良いとおっしゃえば。」

パチュリーは瀬世羅木の方に行く。

パチュリー「貴方の名前は？」

瀬世羅木「…瀬世羅木努です。」

少し苦しい声で言う。

パチュリー「瀬世羅木努。私は、パチュリーノーレッジ。そして小悪魔ね。」

小悪魔が頭を下げる。

瀬世羅木は立ち上がろうとする。

だが。

瀬世羅木「あああああ！！」

又も激痛が走る。

パチュリー「貴方の怪我は私が責任を持って治します。」

瀬世羅木「・・・ありがとうございます。」

レミリア「パチエ。ありがとうね。」

レミリアが微笑む。

パチュリー「良いわよ。レミィの言う友情。それは、貴方が彼をかばった事で分かったわ。」

パチュリーは瀬世羅木を見て微笑む。

瀬世羅木「・・・良かった...。」

瀬世羅木はほっとした。

友情（後書き）

第6章も終了しました。瀬世羅木はパチュリーと小悪魔から図書館の本を見せて貰う事を許されました。彼はこれから、物語を紙に書いていく。次回は「読めない本」でお会いしましょう。

読めない本

パチュリーはキズだらけになった瀬世羅木を座らせ本を見る。

パチュリー「治療法、治療法は…。」

パチュリーがページをずっと捲る。

パチュリー「…これね。」

パチュリーは何か言っている。

瀬世羅木「…本当に治るのかな？」

レミリア「大丈夫よ。何て言っただて何でも物知りのパチエなんだから。」

瀬世羅木「!!!。」

瀬世羅木の体が輝く。

瀬世羅木のキズが消えていく。破れてる服も治ってきてる。

瀬世羅木「すっ凄い。」

瀬世羅木は体を動かす。

瀬世羅木「さっきの痛みがうそみたいだ。」

パチュリー「瀬世羅木、貴方の怪我は完全に治ったわ。・・・だけど、私以外の者が負わせた怪我があったみたいだけど?・・・。」

パチュリーがレミリアを見る。

レミリア「分かっちゃった。」

レミリアは視線を瀬世羅木に向ける。

パチュリー「分かっちゃった。と言う事は何かしたのね?」

レミリアの表情が変わった。

レミリア「・・・グングニルを一度だけ!。」

レミリアが申し無さげな顔で瀬世羅木を見る。

瀬世羅木「いやあ、そんなに気にしなくて良いよ。」

パチュリー「瀬世羅木、貴方それでよく生きてるわね。」

瀬世羅木「いや、それはこれのおかげだよ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れてライターを出した。

パチュリー「レミイが写ってるわね……。ちょっと貸して?」

瀬世羅木はライターをパチュリーに渡した。

パチュリー「・・・凄い力が込められてるわ。」

パチュリーがライターをまじまじと見る。

瀬世羅木「でも、それ自分の世界では普通のライターですよ。」

パチュリーがライターを瀬世羅木に返す。

パチュリー「どうやら、それは幻想郷に来た事で特別な力を手に入れたのかも知れないわ。」

レミリア「瀬世羅木、そのおかげで貴方はフランにも殺されずに済んだのよね。」

瀬世羅木はライターをポケットにしまった。

「キンコンカン。」

時計の鐘の音だ。

皆は時計を見る。

瀬世羅木「・・・3時になってる・・・。」

レミリア「もう、こんな時間！」

パチュリー「さすがに夜更かしね。小悪魔、私は寝るから後は貴方に本の整理を任せるわ。それが終わったら貴方も寝なさい。」

大量の本を持って飛んでる小悪魔が頷く。

瀬世羅木「レミリアとパチュリー、俺、この図書館で寝ても良いですか？」

レミリア「こんな所で寝たら、不健康になるわよ。」

パチュリー「レミィ…こんな所で、って私は此所でいつも寝てるのよ。それに、不健康になる、って…。」

レミリア「ごめんパチエ。悪い意味で言っただ訳じゃ無いわ。」

パチュリー「そうすると彼は何処で寝かせるの？。」

レミリア「空き部屋は沢山あるわ。」

瀬世羅木「空き部屋、何か申し訳無いな。」

瀬世羅木は自分の頭をなげる。

瀬世羅木とレミリアは図書館を出た。

長い廊下でレミリアが一つの部屋を開けた。

レミリア「適当に使ってくれて良いわ。」

瀬世羅木は頭を下げる。

レミリアは部屋を出た。

瀬世羅木は部屋を見る。

机とベットがある。

瀬世羅木「空き部屋なのに凄く綺麗だな。咲夜さんがいつも掃除をしているからかな。」

瀬世羅木は机に座って携帯を出す。

瀬世羅木「なんか、検索しよう。」

瀬世羅木は携帯を見る。

瀬世羅木「何てこった、圏外だ。・・・でも、此所に来て直ぐの時は三本立ってたぞ。」

瀬世羅木は頭を傾げる。

瀬世羅木「圏外じゃ仕方ない。寝よう。」

瀬世羅木はベットに入る。

瀬世羅木「ベットに寝るなんて、初めてだな。」

瀬世羅木は目を瞑る。

？「この、アパートで瀬世羅木努さんの死体が発見されたようです。」

？「瀬世羅木さんはどの様に亡くなられたんですか？」

？「何でもパソコンを打っている最中に亡くなったと思われます。」

瀬世羅木「おい、瀬世羅木努て俺の事じゃないか？」

？「今、瀬世羅木努さんの死体が運ばれてる様です。」

瀬世羅木「うつつそだ。そっそんな筈は無い……。」

警官みたいな人が部屋から出てくる。

瀬世羅木「！！！」

瀬世羅木は驚いた。

目線の先に自分が瀬世羅木努本人が運ばれてるからだ。

瀬世羅木「うそだ、うそだ。」

瀬世羅木は冷や汗が出る。

瀬世羅木「うそだぁー！！！！。」

ベットの所で瀬世羅木は目を覚ます。

外から日が出てる。

瀬世羅木「……何ていう夢だ。」

瀬世羅木はベットから起き上がる。

机に座る。

瀬世羅木「まさか…俺の世界では俺は死んでるのか？……。」

考えるのは止めた。あくまで夢だ。

「コンコン」

扉の叩く音だ。

瀬世羅木は扉の方に行き扉を開ける。

瀬世羅木「咲夜さん。」

咲夜「朝食をお持ちしましたよ。」

咲夜が机に食事を置いてくれる。

瀬世羅木「ありがとうございます。」

咲夜は微笑み部屋を出た。

瀬世羅木は食事を食べる。

瀬世羅木「俺、凄く少食派なんだよな。」

瀬世羅木は食事を食べ終えた。

瀬世羅木「よし！早速、図書館に行くぞ。」

瀬世羅木は部屋を出て図書館に行く。

図書館の扉を開ける。

瀬世羅木「パチュリーは何処にいるかな？」

瀬世羅木は周りを見る。

パチュリー「後ろよ。」

瀬世羅木は驚いて後ろを振り向く。

瀬世羅木「びっくりしましたよ。」

パチュリーが微笑む。

パチュリー「レミィから頼まれてた物を渡すわ。」

パチュリーはメモ帳と万年筆を渡した。

瀬世羅木「これは。」

パチュリー「物語を書くんだってね。書くものが無かったらそれも出来ないからね。」

瀬世羅木「パチュリーありがとう。」

パチュリー「此所の本は適当に読んで良いわ。」

瀬世羅木「分かりました。」

瀬世羅木は本棚に入ってる本を見る。

瀬世羅木「まずは、紅魔館の歴史でしょ。」

瀬世羅木は本棚をくまなく探す。

瀬世羅木「あつたー。」

瀬世羅木は本を取る。

本には紅魔館の歴史と書かれてる。

瀬世羅木は本をあける。

瀬世羅木「ふむふむ。」

瀬世羅木はテーブルに座る。

瀬世羅木「成る程、成る程。」

瀬世羅木はメモ帳に書く。

瀬世羅木「よし！。後は…幻想郷の人物でも調べよう。」

瀬世羅木は本棚を見る。

暫く本棚を見る。

瀬世羅木「あれ、無いぞ。パチュリーが持ってるのかな？」

瀬世羅木がパチュリーを探す。

奥にパチュリーが座ってる。

瀬世羅木「パチュリー。幻想郷の歴史を調べたいんだけど。」

パチュリーが本を渡す。

パチュリー「これよ。」

瀬世羅木は本を受けとる。

瀬世羅木は本をあける。

瀬世羅木「えーと、何々。……ん!。」

瀬世羅木は本の文字を読む。だが。

瀬世羅木「パチュリー。この本読めない。」

パチュリーが笑う。

パチュリー「どうやら、貴方はこの本と相性が合わないみたいね。」

パチュリーが本を受け取り本を積み重なってる本に置こうとした。

「バラバラ!!。」

本が崩れた。

パチュリー「又、やってしまったわ。」

パチュリーが本を片付ける。

瀬世羅木「自分も手伝いますよ。」

瀬世羅木とパチュリーは本を片付ける。

パチュリー「ごめんなさいね。」

瀬世羅木「とんでもないですよ。」

瀬世羅木は本を片付けてる。

一つの本が目に入った。

瀬世羅木はその本を取る。

瀬世羅木は本をあける。

中には名前がずらりと載ってる。

パチュリーが驚く。

パチュリー「そっそっその本の中身が読めるの?.....。」

パチュリーの声が震えてる。

瀬世羅木「普通に読めますよ。」

パチュリーが真剣な顔になる。

パチュリー「その本は私にも読めない本!!。死んでる人にしか読めない本なのよ!!!。」

瀬世羅木の体が震えた。

本から手を離す。

瀬世羅木「・・・なっ、何だって…………。」

瀬世羅木の顔から大量の冷や汗が出る。

読めない本（後書き）

第7章も終了しました。瀬世羅木はパチュリーに恐ろしい事を聞かされる。彼が見た悪夢、その夢が現実の物になってしまうのか。次回「運命」でお会いしましょう。

運命（前編）

瀬世羅木は部屋で机に座ってうつ向いてる。

パチュリー「その本は死んでる人しか読めない本なのよ！！！！。」

図書館で言われたあの言葉が頭から離れない。

瀬世羅木「やっぱり、俺は死んでしまったんだな……。」

瀬世羅木はレミリアがくれたハンカチで汗を拭く。

瀬世羅木「……ハンカチ、洗わないとまずいな。」

瀬世羅木は気をまぎらわせ様とする。

だが、まぎらわす事は出来なかった。

瀬世羅木「俺の世界で、俺が……。」

瀬世羅木は又、うつ向く。

「コンコン。」

扉の叩く音だ。

レミリア「瀬世羅木、入るわよ。」

レミリアが入って来た。

レミリア「・・・パチエから聞いたわ。貴方が死んでいる人物だと言う事を……。」

瀬世羅木はレミリアを見る。

瀬世羅木「・・・、そうですか。」

レミリア「瀬世羅木、その事に思いあたる事がある？」

瀬世羅木は冷や汗が出る。

瀬世羅木「・・・夢……。」

レミリア「え？」

瀬世羅木「夢を見たんだ。俺の世界で、俺が死んでいるのを……。」

瀬世羅木の体は震える。

レミリアが瀬世羅木の肩に手を置く。

レミリア「その夢が、現実にした事って言う訳ね……。」

瀬世羅木は頷く。

レミリアは考えてる。

レミリア「瀬世羅木、それは只の夢よ。」

瀬世羅木「……。」

瀬世羅木は黙っている。

瀬世羅木は立ち上がる。

瀬世羅木「……ちょっと、外の空気を吸ってくる……。」

「ボタン。」

瀬世羅木は部屋を出た。

レミリア「……瀬世羅木……。」

瀬世羅木は紅魔館の門の方に歩いてる。

咲夜「中国！。貴方って言う人は！！。」

門の外の方から声がする。

美鈴「咲夜さん、そんな恐ろしい表情でナイフを突き付けないで下さい！。」

瀬世羅木が門を出る。

美鈴が瀬世羅木を見る。

美鈴「咲夜さん！侵入者がいます！。」

咲夜が瀬世羅木を見る。

咲夜「中国！彼は立派なお客様よ！。さては貴方、昨日の夜もサボってたのね！！。」

咲夜が無数のナイフを出す。

咲夜「串刺しになりなさい！！。」

無数のナイフは美鈴目掛けて飛ぶ。

美鈴がもうスピードで逃げる。

だがナイフは物凄い速さで美鈴を追いかける。

美鈴「ああああ！！！！。」

美鈴の悲鳴が聞こえる。

瀬世羅木「・・・美鈴さん…。かわいそうに…。」

咲夜「ふんっ！！。」

咲夜が腕を組む。

咲夜が瀬世羅木を見る。

咲夜「何か顔色が悪いですよ。」

瀬世羅木「・・・ちよっと、ありまして。」

咲夜「そうですか。」

咲夜が懐中時計を出した。

咲夜の姿が消えた。

向こうの方から美鈴が帰って来た。

美鈴「咲夜さんは、もういなくなっただんですね。」

服がズタズタだ。

瀬世羅木「・・・ええ、今さっき。」

美鈴「そう。ところで貴方は誰なんですか？」

瀬世羅木「・・・瀬世羅木努です。」

美鈴「瀬世羅木努？。変わった名前ですね。」

瀬世羅木「ちゃんとした本名ですよ。・・・たぶん...。」

美鈴が瀬世羅木をまじまじと見る。

美鈴「随分、ひょろい体ですね。とても、男の人とは思えない。」

美鈴が笑う。

瀬世羅木は頭をなげる。

瀬世羅木「痛いところを突くな。」

瀬世羅木は心の中で呟く。

瀬世羅木「・・・そう言えば。最初に美鈴さんに会った時、パンチを喰らって、凄く痛かったな。でも何でだ。」

瀬世羅木はライターの入ってるポケットをみる。

瀬世羅木「まだ、守られてなかったのかな？」

「

美鈴「それでは、私は寝ますので。誰か来たら起こして下さいね。」

瀬世羅木「いや、いや、何ですか？」

美鈴が首を傾げる。

美鈴「あれ、新しい門番じゃないの?!」

瀬世羅木はため息が出る。

瀬世羅木「ダメだこりゃ。」

美鈴はあっという間に寝てしまった。

瀬世羅木は紅魔館の中に戻った。

部屋に戻る。

瀬世羅木「何だこれ？」

瀬世羅木は机に置かれてる紙を見る。

瀬世羅木「何々。」

名前はレミリアと書かれてる。

レミリア「貴方の運命、それを私の能力で修正出来るかも知れないわ。夜、図書館で待ってるわ。」

瀬世羅木は紙を机に置いた。

瀬世羅木「レミリア。」

夜になり瀬世羅木は図書館に行く。

図書館の扉を押す。

瀬世羅木は周りを見る。

レミリアとパチュリーがテーブルに座っている。

レミリア「待っていたわ。貴方の運命、私が修正するわ。」

瀬世羅木「レミリア……。俺は死んでる者かも知れないんだ。死んでる者の運命を変える何て出来るのか？」

レミリア「まだ、確定した訳では無いわ。貴方は死んだと思ってるかも知れないけど私の能力でそれを変えるわ。」

レミリア「パチエ！。お願い。」

パチュリー「分かったわ。」

パチュリーは「究極の禁魔法書」と書かれている本をあける。

瀬世羅木「パチュリー、それ禁魔法って書いてあるよ。」

パチュリー「そうよ。レミイをこれから貴方の記憶の中に飛ばすわ・・・本当はこんな事はいけないんだけど、レミイと私と皆は貴方の友人だもん！！。」

瀬世羅木は涙が出る。

瀬世羅木「・・・ありがとう...。」

パチュリー「レミイ！いくわよ！！。」

レミリア「分かったわ！！。」

レミリアの体が光る。

パチュリー「瀬世羅木！貴方も椅子に座って！」

瀬世羅木は椅子に座った。

レミリアがテーブルに顔を置き目を瞑る。

瀬世羅木も目を瞑る。

レミリアの体の輝きが消えて行く。

パチュリー「レミィ、頼むわよ。」

パチュリーは本を閉じた。

運命（前編）（後書き）

第8章も終了しました。今回は前編です。レミリアは瀬世羅木の記憶の中に行く。その中でレミリアは本当の真実をしる。次回はレミリアが優先に物語が進む。次回の「運命」（後編）でお会いしましょう。

運命（後編）

レミリアは異次元をさ迷よつてゐる。

レミリア「瀬世羅木。」

物凄い光りに包まれる。

見た事の無い部屋の中だ。

レミリア「此所は、一体。」

レミリアが奥の方に行く。

レミリア「！！。瀬世羅木。」

レミリアが瀬世羅木の体を揺らす。

瀬世羅木「・・・ん？」

瀬世羅木は目を覚ます。

瀬世羅木は驚く。

瀬世羅木「あつ、貴方は？」

レミリアが微笑む。

レミリア「私は、幻想郷の一人で紅魔館の主のレミリアスカーレット

トよ。」

瀬世羅木は首を傾げる。

瀬世羅木「レミリアスカーレット！？。」

瀬世羅木はまじまじと見る。

だが、瀬世羅木は何か何だか分からなくなった。

瀬世羅木「何て事だ。俺は物語を書こうとしていて現実と夢がごちゃごちゃになってしまったのか。」

レミリア「ごちゃごちゃになっていないわ。貴方は今、現実を見ているよ。」

瀬世羅木は頭の整理をする。

瀬世羅木「レミリア殿、一体何でこうなったか分からないが、会えて感謝する。」

瀬世羅木は微笑む。

レミリア「単刀直入に言うわ。貴方は幻想郷の紅魔館に来てそこで私達、紅魔館の皆と会ってるのよ。」

瀬世羅木「まさか。」

瀬世羅木は笑う。

レミリアの表情が真剣になる。

レミリア「瀬世羅木。なら私が何で此所にいるか分らないの？」

瀬世羅木は考える。

瀬世羅木「・・・。話を聞かせてくれ。レミリア殿が来た訳を。」

レミリア「幻想郷に来てる貴方の話だと、夢の中でこの世界の貴方が死んでいる、と言うのよ。その原因を知る為に来たのよ。」

瀬世羅木「・・・俺が…死んでいる……。」

瀬世羅木はうつ向く。

瀬世羅木「・・・で、俺をどうするんだ。」

レミリア「貴方を助けるのよ！。他に何かあるかしら？」

瀬世羅木「・・・俺を助けるか。まさかゲームの世界の人物が俺を助けてくれるとは……。」

瀬世羅木は立ち上がる。

瀬世羅木「俺は貴方を信じる。俺が一番に尊敬する人物。その方が嘘を言うとは思えない。」

レミリア「ありがとう。瀬世羅木。」

瀬世羅木「で、俺が死ぬと言うのは、一体どんな風に死ぬんだ。」

レミリア「それは聞いていないわ……。」

？「それは、今から俺がお前を殺すからさ！」

レミリア& a m p；瀬世羅木「誰！！！」

二人は声の方を向く。

レミリアと瀬世羅木は驚いた。

二人の目線に瀬世羅木努が立っているからだ。

努は恐ろしい表情で瀬世羅木を見る。

努「俺は悔いに悔いた。お前が幻想郷に行きもしなかったら、この俺は死なずに済んだんだ！！。」

瀬世羅木「一体、何を言ってるか分からない！！。」

努「俺は幻想郷の紅魔館に迷い殺されたんだ！！。そこにいる人物に！！！」

努はレミリアを指差す。

レミリア「何を言っているの！？。私は貴方を殺してなんかいないわ！」

努「人にグングニルを2回も放つてよくそんな事が言えるな！！。」

レミリア「2回？。そんな筈は無いわ。私は1回だけ放っただけよ……。」

瀬世羅木「パラレルワールドだ。」

レミリア「えっ？」

瀬世羅木「つまり、貴方と仲良くなる俺がいるみたいにその逆に俺が殺される世界もあると言う事だ。」

レミリア「・・・そんな……。」

努はレーヴァテインを持つ。

レミリア「それはフ란の！？。」

瀬世羅木「何て事だ！自分自身に殺されるのか？」

レミリアは努の前に立つ。

レミリア「・・・私は貴方を殺したのね。その責任はちゃんと取るわ……。」

努「さすが、俺が一時は尊敬した人物だ。」

努はニヤ付く。

瀬世羅木「レミリア殿！止すんだ！！。」

努はレミリアの方に走る。

レミリアの頭上に努がレーヴァティンを振り上げる。

努はレーヴァティンを降り下ろした。

「ガンッ。」

レーヴァティンは直撃した、瀬世羅木の頭に。

レミリア「瀬世羅木!!。」

瀬世羅木「ぐっ!!!。」

瀬世羅木の頭から大量の血が出る。

瀬世羅木は倒れる。

努「使っているのが俺だけにパワーが無かったな。」

レミリアは瀬世羅木の体を揺らす。

レミリア「瀬世羅木!、瀬世羅木!。」

瀬世羅木は目を開ける。

瀬世羅木「・・・だっだっ大丈夫だ…。俺自信だ、力はそんなに無いのは知っている……。」

瀬世羅木は目を瞑る。

努「次はお前だ！！！」。

努はレミリアを見る。

レミリアの瞳が輝く。

レミリア「瀬世羅木。自分自身とは言え。とんでも無い事をしたわね……。」

レミリアは努を睨む。

努「その表情だ。俺を殺した時のその表情！」

努は恐ろしい表情でレミリアを見る。

レミリア「……貴方には……もう一度死んで貰うわ！！！」

レミリアは右手を広げグングニルを出した。

右腕を上げ先端を努に向ける。

努「こんな所でそんな物を放って良いのか？。部屋が跡形も無くなるぞ。」

レミリアは首を横に振る。

レミリア「いいえ、此所は瀬世羅木の記憶の中。部屋にダメージは無いわ。……でも、貴方は別よ。」

レミリアは右腕に最高に勢いをつける。

努「待ってくれ!!。お前はそれを本気で投げれるつもりなのか! ?。」

レミリア「聞く耳持たないわ!。」

レミリアはグングニルを投げた。

努は飛んでくるグングニルを見る。

努「ふつ。今そこで、倒れてる俺がうらやましいぜ。・・・俺は本当についてないよ。」

「ドッカーン!!!。」

グングニルは大爆発した。

煙が立つ。

レミリア「・・・。」

煙が止んで来た。

努の姿は無い。

レミリア「瀬世羅木!!。」

レミリアは瀬世羅木を起こす。

瀬世羅木「・・・もう一人の...俺は、消えたのか?。」

レミリアが頷く。

レミリア「ええ、消えたわ。」

瀬世羅木はタオルを取り頭を押さえる。

瀬世羅木「俺の奴、本気で当てやがって。」

瀬世羅木の頭の血は止まって来てる。

瀬世羅木「何とか、大量出血にはならず済んだ。」

レミリア「瀬世羅木。貴方、あれを持ってるよね？」

瀬世羅木「あれとは何だ？。」

レミリア「私が写ったライターよ。」

瀬世羅木「ああ、確かに持つてる。一体何に使った？」

レミリア「それに私の力を入れるわ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れライターを

レミリアに渡した。

レミリアはライターを受け取り強く握る。

ライターが輝く。

輝きは止みライターを瀬世羅木に返した。

瀬世羅木「何をしたんだ？。」

レミリア「私の能力。運命を操る能力を込めたのよ。」

瀬世羅木「運命を操る？」

レミリア「ええ、そうよ。それで貴方は自分の危険を感じた時にその力が貴方を守ってくれるわ。」

瀬世羅木「ありがとう。」

レミリアは微笑む。

レミリア「これで貴方は死んで無い事になったわ。私もこれで帰る事が出来るわ。」

レミリアは立ち上がる。

瀬世羅木「レミリア殿、又、貴方に会えますかな？。」

レミリア「ええ。」

瀬世羅木「その時に又、貴方にお礼を言います。」

レミリア「悪いけど、それは出来ないわ。貴方は今、此所で起きた記憶は残らない。でも、貴方が来た時に必ずこの事は伝えてあげるわ。」

瀬世羅木「分かりました。」

レミリアの体が輝く。

パチュリー「レミィ。」

パチュリーの声だ。

レミリア「パチエ。」

紅魔館の図書館でレミリアは目を覚ます。

パチュリー「上手く行ったのね。」

レミリア「瀬世羅木は！？。」

パチュリー「目を瞑ってるわ。そろそろ起きる頃よ。」

レミリアが瀬世羅木の方に行く。

レミリア「瀬世羅木。」

瀬世羅木「・・・ん？。」

瀬世羅木は目を覚ます。

瀬世羅木「レミリア。どうだった？。」

レミリア「ええ、貴方は死んで無い事になったわ。別の世界の貴方が貴方を殺そうとしたのよ。でも私はその彼を…。」

レミリアは悲しい表情をする。

瀬世羅木「レミリア。そんな悲しい表情をしないで下さい。貴方は俺を倒したんじゃない、俺の邪心を倒してくれたんだ。」

レミリア「瀬世羅木。」

瀬世羅木「これで俺は、安心して物語を書いて行けるよ。本当にありがとう。」

瀬世羅木は微笑む。

レミリアも微笑み返した。

運命（後編）（後書き）

第9章も終了しました。瀬世羅木はレミリアのおかげで現実世界で死んで無い事になりました。次回はフランが登場します。次回「フランの弾幕ごっこ」でお会いしましょう。

フランの弾幕っっ

瀬世羅木は紅魔館の外の蛇口に水を出しタライに水を入れてる。

瀬世羅木「大分汚れてしまったな。落ちるかな?。」

瀬世羅木は洗濯板を取ってハンカチを擦る。

瀬世羅木「おっ!。結構汚れが落ちる、落ちる」

レミリアが窓から瀬世羅木を見る。

努「待ってくれ!!。お前はそれを本気で投げれるつもりか!?。」

瀬世羅木の記憶の中に出会った努の声が頭から離れない。

レミリア「・・・。」

パチュリー「レミィ。」

レミリアは声のする方を向く。

レミリア「・・・珍しいわね。図書館を滅多に出ない貴方なのに?。」

パチュリー「レミィの事が気になったのよ。貴方、瀬世羅木にもう一人の瀬世羅木を倒したって言った時、凄く悲しい顔をしてたから...。」

レミリアは外にいる瀬世羅木の方を向く。

レミリア「ええ、私は彼を殺したのよ…。この手で……。」

レミリアはうつ向いた。

パチュリー「でも、瀬世羅木はそれは違うと言ってくれたわ。レミイが倒したのは彼の邪心だって。」

レミリア「……。でも、本人を殺した事には変わり無いわ……。」

パチュリー「レミイ……。」

瀬世羅木「レミリアは何処にいるのかな?。」

瀬世羅木は洗濯を終えて紅魔館の廊下を歩いている。

レミリアとパチュリーがいた。

瀬世羅木「レミリア。此所にいたのか。」

瀬世羅木はレミリアを見る。

レミリア「……。」

瀬世羅木「どうしたんだ?レミリア。」

パチュリーが瀬世羅木を掴む。

パチュリー「瀬世羅木、今は駄目よ。」

瀬世羅木はパチュリーに引っ張られて行つた。

瀬世羅木「ちよつ、ちよつ、これを渡すんだって!。」

瀬世羅木はハンカチを持っている。

パチュリーはそのまま引っ張って行く。

瀬世羅木は部屋でパチュリーと話してる。

瀬世羅木「・・・レミリアが…。」

瀬世羅木は真剣な顔になる。

パチュリー「ええ、レミィはその手で貴方を殺した事を深く気にしてるわ。」

瀬世羅木は自分の頭をなげる。

瀬世羅木「俺は、気にしないで下さいって言ったのに。」

瀬世羅木はドアの方に行く。

パチュリー「何処へ行くの?。」

瀬世羅木「レミリアの部屋さ。本当に気にしないで良いよ、ってあげなきゃレミリアがかわいそう過ぎる。」

「ボタン。」

瀬世羅木は廊下を歩いて階段をのぼる。

レミリアの部屋のドアの前に着いた。

「コンコン。」

瀬世羅木「レミリア？」

返事が返ってくる。

レミリア「……。貴方と顔を会わせられないわ…。」

瀬世羅木「レミリア。俺の記憶の中で起きた事を気にしているんだろ。本当に気にしないで良いから。」

レミリア「……。」

返事が返ってこない。

だが。

レミリア「入って来なさい。」

瀬世羅木は部屋に入る。

レミリアはうつ向いてる。

瀬世羅木「レミリア。本当に気にしないで良いよ。貴方は俺の邪心を倒してくれたんだ。俺を殺した訳では無い。」

レミリア「無理よ…。貴方の記憶の中で彼にゲングニルを放つ時、彼が言った言葉。その時は聞く耳持たないわ、って言ったけどあの時の彼の言葉からは間違いなく哀しみが伝わってたわ。」

瀬世羅木「ぐっ。」

瀬世羅木は言葉が出なくなった。

瀬世羅木は考える。

瀬世羅木「確かに。そうかも知れない。俺がレミリアを尊敬する人物の様に、俺の邪心も同じ思いのはず。」

瀬世羅木はレミリアを見る。

瀬世羅木「…。俺の責任だ…。何とかしなければ…。」

瀬世羅木は深く考える。

瀬世羅木「よしっ、これだ!。」

瀬世羅木「レミリア。フ란の所に行かないか?。」

レミリア「フ란!?。」

レミリアは首を傾げる。

瀬世羅木「レミリアとフ란じゃないと無理なんだ。」

レミリア「無理と言うのは?。」

瀬世羅木「フ란の弾幕ごっこを見せて貰いたいんだ。」

レミリア「????。」

瀬世羅木とレミリアは地下牢の方に歩いてる。

鉄の扉の前に着いた。

瀬世羅木は扉を開ける。

瀬世羅木とレミリアは中に入る。

フ란が座ってる。

フ란「お姉様。」

フ란がレミリアの方を向く。

レミリア「瀬世羅木が貴方の弾幕ごっこを見たいんだって。」

フ란が立つ。

フ란「弾幕ごっこを????。」

レミリアが頷く。

瀬世羅木「俺はそれをメモに書かせて貰う。フ란の弾幕ごっこを。」

フラン「でも、相手がいないと無理よ。」

瀬世羅木「相手はレミリアにやって貰います。」

レミリアは驚く。

レミリア「瀬世羅木！それで私がいないと無理と言ったのね！」

瀬世羅木「レミリア。ここは一つ頼む、俺はあいにく、只の人間でおまけに凄い非力なんだ。とてもじゃ無いがフランの相手は出来ない。」

瀬世羅木が頭を下げる。

レミリア「・・・分かったわ。」

フラン「お姉様と弾幕ごっこ。楽しくなりそうだわ。」

レミリア「でも、瀬世羅木。私とフラン程の力よ貴方も巻き込まれるかも知れないわ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れライターを出した。

瀬世羅木「さつきパチュリーに新品にして貰ったんだ。直接俺に飛んで来なかったら大丈夫だよ。」

レミリアは頷く。

レミリアはフランを見る。

レミリア「フラン！。本気で行くわよ！。」

フラン「お姉様！私もよ。」

地下牢の中が凄い熱さになってきた。

レミリアは両手を広げグングニルを出した。

フランはレーヴァティンを右手に出した。

フラン「スターボウブレイク！！」

物凄い光が出る。

フラン「ふふ。」

フランはレミリアの立っていた所を見る。

フラン「！！！！」

レミリア「後よ！！」

レミリアは右腕に最高に勢いをつける。

フランが向く。

レミリアはグングニルを投げた。

「ドッカーン！！！！」

グングニルが大爆発する。

レミリア「……。」

レミリアがグングニルを放った先フランの方を向く。

レミリア「！！！」

レミリアの周りに緑色をした線が囲む。

フラン「お姉様！！。終わりよ！！。」

フランがレーヴァティンを降り下ろす。

物凄い炎がレミリアをのみこむ。

フラン「やったわ！！。」

レミリア「無駄よ！」

フランの後ろにレミリアが立っている。

フラン「さすがお姉様ね！」

レミリア「フラン。もう、貴方も終わりよ。」

フラン「お姉様！。まだ終わらないわ。」

フランはレーヴァティンを天井に投げた。

レミリア「同時攻撃をはかる気ね。」

フランは両手を握りレミリアに向ける。

レミリアは左腕に最高に勢いをつける。

フランの握る両手が輝く。

レーヴァテインが地面に落ちる。

レミリアはグングニルを投げた。

フランは両手を広げた。

レミリアのグングニルとフランのスターボウブレイクがぶつかり合う。

瀬世羅木「とてつもない力だ。」

瀬世羅木はメモを書く手が止まった。

「ピシッピシッ。」

地下牢の壁にヒビが凄い事になってる。

「ドッカーン!!!」

瀬世羅木「うわあ!!。」

瀬世羅木は物凄い衝撃で飛ばされた。

瀬世羅木は壁にぶつかる。

瀬世羅木は直ぐにレミリアとフランの方を向く。

煙が立つて見えない。

瀬世羅木「どっちが勝ったんだ？」

煙が止んで来た。

レミリアとフランは立っている。

フラン「お姉様やりますね…。」

レミリア「フラン貴方もよ…。」

「ボタン！」

二人は倒れた。

瀬世羅木「レミリア！フラン！」

瀬世羅木は二人の方に行く。

レミリアとフランの体を揺らす。

レミリアとフランは立ち上がる。

瀬世羅木「ふう、良かった。」

レミリアはフランを見る。

フランもレミリアを見る。

レミリア「まさか、ごかくなんてね。」

フラン「ごかくなのは残念だね。」

レミリアが瀬世羅木を向く。

レミリア「瀬世羅木。もう少し続けた方が良かったかしら?。」

瀬世羅木は首を横に振る。

瀬世羅木「とつ、飛んでも無い。もう十分過ぎる程見せて貰ったよ。」

レミリアは微笑む。

フラン「じゃあ!、第二回戦。私と瀬世羅木の弾幕ごっこよ!!!。」

瀬世羅木「フラン!。よしてくれよ!。俺なんかとやってもあっけなさ過ぎて面白く無いと思うよ。」

フラン「ふーん。」

フランが腕を組む。

瀬世羅木はレミリアを向く。

瀬世羅木「レミリアどうだ？。嫌な思い出も吹っ飛んだんじゃないか？。」

レミリア「そうね。貴方の言う通り。私は貴方を殺したのでは無く、貴方の邪心を倒してあげた。・・・それで本当に良いのかしら？」

瀬世羅木は頷く。

フランが二人を見る。

フラン「??？」

フランが首を傾げる。

「ガラッ……」

フラン「!!!!」

天井の岩が外れた。

フラン「瀬世羅木!!!!天井!!!!。」

瀬世羅木はとつさに天井を向く。

瀬世羅木「うわああああ!!!!。」

フランの弾幕ごっこ(後書き)

第10章も終了しました。見て頂いてる方々に心より感謝します。
瀬世羅木の頭上に岩が落ち様とする。彼はどうなるのか。次回「こ
んな筈では」でお会いしましょう。

こんな筈では

「ガラッ…」

フラン「瀬世羅木！！天井！！。」

瀬世羅木「うわああああ！！！！」

「ドッゴン！」

瀬世羅木「??」

瀬世羅木は岩から離れてる。

瀬世羅木「これは、一体？」

咲夜「危ないところでしたね。」

レミリア「咲夜。」

レミリアはほっとする。

フラン「瀬世羅木…。危なかったわ。」

瀬世羅木は咲夜の方を向く。

瀬世羅木「咲夜さん。本当にありがとう。」

咲夜は微笑む。

レミリア「咲夜、貴方が瀬世羅木を助けてくれなかったら危なかったわ。」

瀬世羅木「でも、自分は守られてるんじゃない。」

レミリアが首を横に振る。

レミリア「それは、あくまで弾幕での話し。岩とかは当たったらまずいわ。」

瀬世羅木の体が震えた。

瀬世羅木「咲夜さん。助けてくれた恩返しをさせて下さい。」

咲夜が又も微笑む。

咲夜「いいえ、恩返しなんて。」

レミリア「咲夜、瀬世羅木の言う通りだわ。何か恩返しをされなさい。」

咲夜「そうですか。」

レミリアは瀬世羅木を向く。

レミリア「瀬世羅木。明日の1日だけ咲夜のお手伝いをしなさい。」

瀬世羅木は頭をなげる。

瀬世羅木「咲夜さんのお手伝いか。体が持つかな?。」

レミリア「瀬世羅木。まさか今になって返せません!なんて言わないわよね。」

瀬世羅木「とつ、とんでもない。恩返しは必ずしますよ。」

レミリアが笑う。

咲夜「瀬世羅木さん。失礼かと思いますが、私よりも細いその体では...。」

瀬世羅木「うっ!」

瀬世羅木は痛いところを突かれたと言う表情になる。

瀬世羅木「すいません!。まさかそこまで気にするとは思いませんでした。」

瀬世羅木は微笑む。

レミリア「もしかして?力もそんなに無いの?」

瀬世羅木「自分、学生時代、最強の非力男、と言われてた位ですから...。」

レミリア「でも片付けはお手のものじゃないかしら?」

瀬世羅木「レミリア?。何でそう思っの?」

レミリア「貴方の記憶の中で、貴方の部屋を見たからよ。随分綺麗にしていたみたいだからね」

瀬世羅木「そうか…レミリアは俺の部屋を見てるのか。」

レミリア「咲夜。彼は掃除なら貴方の役に立つ筈よ。」

咲夜「掃除ですか。」

咲夜が瀬世羅木の方に行く。

咲夜「それでは明日、掃除をお願いします。」

瀬世羅木「なんか、緊張するな。」

レミリア「フラン。貴方も咲夜の手伝いをする。」

フランはそっぽを向いてる。

レミリア「フラン、又、来てあげるわ。」

瀬世羅木「フラン。ありがとうね。」

咲夜「フランドールお嬢様それでは明日。」

瀬世羅木達は地下牢を出た。

階段をのぼり廊下に出る。

瀬世羅木「咲夜さん。ちょっとすいません。」

瀬世羅木「ゴニョゴニョ。」

瀬世羅木は咲夜に話す。

咲夜「分かりました。」

咲夜は在るものを瀬世羅木に渡した。

瀬世羅木「咲夜さん。ありがとう。」

瀬世羅木は部屋に戻る。

瀬世羅木「よし！明日は頑張るぞ！。・・・その前に。」

瀬世羅木は部屋を出た。

朝が来た。

瀬世羅木はレミリアに咲夜の部屋を聞き咲夜の部屋のドアの前にいる。

瀬世羅木「咲夜さん。」

咲夜「はい。」

咲夜がドアを開ける。

瀬世羅木を見る。

瀬世羅木はジャージ姿になってる。

瀬世羅木「咲夜さん。このジャージ、ピッタシですありがとうございます。」

咲夜「本当は新しく来た時の掃除員に渡す服なので気に入って貰えるかは分らなかったのですが。」

瀬世羅木「とんでもないですよ。」

咲夜「それで、元々着ていた服は？」

瀬世羅木「それでしたら、紅魔館の隅の外で干してあります。」

瀬世羅木と咲夜は紅魔館の扉の前にいる。

咲夜「掃除を始める前にある人を起こしますよ。」

瀬世羅木「ある人とは？」

咲夜「いつもサボっている人ですよ。」

瀬世羅木「美鈴さんだ……。」

瀬世羅木は心の中で呟く。

瀬世羅木と咲夜は門の方に歩く。

咲夜「中国!!。」

咲夜は門の外に出て言う。

瀬世羅木も出る。

だが美鈴は起きてる。

美鈴「咲夜さん。私はずっと起きてますよ。」

咲夜は美鈴を見る。

咲夜「なら、何で、服がそんなにボロボロなの？」

美鈴「これは……。」

咲夜が美鈴を掴む。

咲夜「さては、貴方！！。私が来る前にお嬢様に起こされたのね！！。」

咲夜がナイフを出す。

美鈴「咲夜さん！勘弁して下さい。お嬢様にドカンとやられたんですから。」

プチん。

咲夜の理性がキレル音だ。

咲夜「中国！！。もう、勘弁出来ないわ！！。」

瀬世羅木は門の中に入る。

美鈴「ああああああ!!!!。」

門の外から美鈴の悲鳴が聞こえる。

瀬世羅木「美鈴さん……。本当にかわいそうに。」

咲夜が来た。

咲夜「まったく、しょうがないわ!。」

咲夜は腕を組む。

咲夜は瀬世羅木を見る。

咲夜「次は貴方をお願いするわ。」

瀬世羅木は首をおもいつき横に振る。

咲夜が笑う。

咲夜は瀬世羅木の手を持つ。

咲夜「今から時間を止めます。」

瀬世羅木「時間を止めると言っても自分は無理だと思います。」

咲夜は懐中時計を瀬世羅木に渡した。

咲夜「それを持っていけば大丈夫です。私が時間を止めても貴方もその中に入れます。」

咲夜は目を瞑る。

瀬世羅木「!？」

周りの動きが止まった。

咲夜「これで貴方に掃除を任せられます。」

瀬世羅木「でも、咲夜さん。時間を止めてると1日の時間が分からなくなるのでは？」

咲夜「あつ...。」

咲夜が笑う。

咲夜「大丈夫です。夜迄になる時間は私が図っておきます。」

瀬世羅木「咲夜さん。夜迄、何も食べないで大丈夫なのかな？。自分分は別に1日位何とも無いけど。」

瀬世羅木は呟く。

瀬世羅木と咲夜は紅魔館の廊下から階段、各部屋、隅々まで掃除をしていく。

瀬世羅木「ふう、まだ、半分もいつてないよ。」

瀬世羅木は咲夜を見る。

咲夜は凄いペースで掃除してる。

瀬世羅木「……。こんな筈では。まさかこれ程までに広いなんて。」

瀬世羅木は掃除を続ける。

紅魔館は見違える程綺麗になった。

瀬世羅木「ふう、ほとんど咲夜さんがやったみたいなものだよ。」

咲夜が瀬世羅木の方に来る。

咲夜「本当にご苦労様です。」

瀬世羅木「いやあー。まさかこんなにきついとは。自分に意識があるのが不思議な位です。」

咲夜が微笑む。

瀬世羅木「咲夜さん。それで今はどの位の時間が経ちました？」

咲夜「……。すいません。カウントしていませんでした……。」

瀬世羅木「そんな……。でも良いです。紅魔館の掃除のお手伝いが出たので。」

咲夜は又、瀬世羅木の手を持つ。

咲夜「それでは、戻りましょう。」

咲夜は目を瞑る。

周りの動きが動いた。

だが。

瀬世羅木「咲夜さん！？夜になってますよ！」

咲夜「もしかしたら、貴方に時計を貸した事で能力が少しずれたのかも知れません。」

咲夜は申しなさげな顔になる。

パチュリー「咲夜。」

咲夜はパチュリーの方を向く。

咲夜「パチュリー様。どうしたのですか？」

パチュリー「レミイがかんかんに怒ってるわよ。紅茶が飲めないって」

咲夜「そんな！？」

瀬世羅木は咲夜の方に行く。

瀬世羅木「咲夜さん。今日はありがとう。」

咲夜は頷くと姿が消えた。

瀬世羅木「あっ！！。咲夜さんの懐中時計！」

瀬世羅木は懐中時計を出す。

パチュリーが手を出す。

パチュリー「私が咲夜に渡すわ。貴方は今日は疲れてると思うから。」

瀬世羅木「ありがとう。パチュリー。」

瀬世羅木はパチュリーに懐中時計を渡す。

瀬世羅木は紅魔館の隅の方に行き干してある自分の服を取った。

瀬世羅木「よし！乾いてる。」

瀬世羅木は部屋に戻る。

メモ帳に今日の事を書いている。

瀬世羅木「こんな感じかな。」

瀬世羅木はメモ帳をしまった。

「ガチャン。」

部屋から誰が入って来た。

瀬世羅木「レミリア。」

レミリアが瀬世羅木の方に来る。

レミリア「ライターを見せてくれない？」

瀬世羅木「ライター。良いよ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れライターをレミリアに渡した。

レミリア「・・・。」

レミリアはライターを受けとる。

レミリアはライターを自分のポケットに入れた。

瀬世羅木「レミリア。ライター返してよ。」

レミリア「いいえ、ライターは返さないわ。」

瀬世羅木は首を傾げる。

瀬世羅木「どうして？」

レミリア「それは・・・。」

瀬世羅木「それは？」

レミリア「貴方を殺すからよ!!!!。」

こんな筈では（後書き）

第11章も終了しました。レミリアはいきなり瀬世羅木に恐ろしい事を言う。彼を守る力のライターはレミリアに取られてしまった。彼は完全に無防備のままレミリアの能力を受ける事になる。次回「最大のグングニル」でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6239y/>

東方 紅魔館物語

2011年11月23日16時48分発行